Ⅵ－4　河床波とガン

村瀬次男（九州電力），村瀬寿男（村瀬土研）

ガンの正体解明の研究は，山極勝三郎まではよかつたが，それ以後間違つた方向に進んでしまつた。現在のガン専門家によるガン正体解明の研究は，すべて袋小路の中の研究である。以下に記す私の進化論と私の発ガン説の重要な結論が，そのことを示している。

1。種の進化の公式
＝進化の外因＋進化の内因（バタフライのカタストロフイー＋突然変異＋自然選択※）
ここで，進化の外因＝突然変異を生じるもの。突然変異を生じるものには大きく分けて3つある。(1) 種の個体を死傷させ，種の分裂（分化）をもたらすもの～大進化の外因　(2) 食物（エントロピー生成の流れ）を漸減させ，種の融合をもたらすもの～高進化の外因　(3) エネルギー代謝を高進させ，種の個体の交替を促進するもの～小進化の外因
私の進化論は，カルノー（熱力学第2法則）＋ダーウイン（自然選択）の進化論である。そして，この新しい進化論の建設なくして，ガンの正体の解明は不可能であつた。

2．種の階層と発ガン

階　層	種	種の情報	進化の現象
たん白質レベル	同一たん白質の集団	酵　素	前生物系
細胞レベル	同一単細胞生物の集団	D N A	生命の誕生
	同一分化細胞の集団	D N A	発ガン，脱ガン
多細胞生物レベル	同一多細胞生物の集団	D N A	生物の進化，絶滅
人間のレベル	同一派閥の人間集団	行動の規範	政治革命，科学革命

上表の種の階層は高進化がつくつたものである。
ところで，種とは何か。一言でいえば，進化するもの（進化の直接の対象）である。そして，同一形態，同一行動パターンの個体の集団であり，そのような個体をつくる種の情報をもつものである。

3．ガン細胞の理論的存在証明と発ガンプロセスの理論的存在証明
進化＝A →C →A′　発ガン＝A →C →B′　脱ガン＝B′→A′　ガン細胞＝B′にとどまる細胞
ここで，A：老化の種の非分裂領域，A：若返りの種が老化の種になる領域，B：老化の種の分裂領域，B′：若返りの種の分裂領域，C：老化の種の絶滅領域，そして，若返りの種の発生領域
上の2点の理論証明ができるのは，私の発ガン説だけである。

4．2種類の細胞老化
(1) 健康な老化～突然変異を生じないで，ポテンシヤルの自由エネルギーだけが低下する老化　(2) 病的老化～突然変異を生じ，種の絶滅と発ガンが起こる老化

5。発ガンの外因＝進化の外因＝突然変異を生じるもの

ガンの種類	発ガン型式	発ガンの外因
胃ガン	大進化型	塩分摂取，熱い食物（細胞の死傷）
子宮けいガン	大進化型	性交（細胞の死傷）
子宮体ガン，乳ガン	高進化型	女性ホルモンの減退（リンパ流の漸減）
肺ガン	大進化型	喫煙（細胞の死傷）
大腸ガン	高進化型	脂肪食（リンパ流の漸減）
ブドウ糖発ガン	小進化型	細胞のエネルギー代謝の高進

発ガン物質という特別のものは存在しない。

6。ガン細胞の正体
ガン細胞～種の絶滅後生き残りの変異細胞（新しい環境に適応した細胞）で，免疫のフイルターを通過したもの。ガン組織～種間の変異差の小さい細胞種世界。

7．不完全免疫と不完全選択の故に発ガンが起こる
不完全免疫～発ガン動物＝リンパのある動物（免疫があるから発ガンがある），免疫が弱いと発ガンしやすい，この一見矛盾する両事実を説明する。不完全選択～これは種間変異差が小さいと自然選択が有効に働かないことの意で，ガン細胞の自律性を説明する。

8．分子生物学の無力さ
発ガンは細胞集団の熱力学現象であるから，発ガンのしくみを知るためには，細胞の中へ入つて行つてもムダで，細胞の外に注意する必要がある。ガンの正体解明における分子生物学の敗北は，還元論の敗北である。

9．細胞説の再確認
分化細胞のレベルに発ガンという進化があることは，細胞説を再確認するものである。

10．細胞におけるセイ一説
発ガンの外因は，進化の外因がそうであるように，極めてゆつくりと長期にわたつて作用するものでなければならない。発ガンは細胞に見るセイ一説である。

※自然選択については，大進化と高進化は種の選択であり，小進化は個体の選択である。また，突然変異も，大進化用突然変異，高進化用突然変異，そして，小進化用突然変異と3 大別されるはずである。